

ズイツクスのこうした熱心な肩入れは、パレスティナをイギリスの勢力圏とみなしていたドイツ外務省の共にするところとはならなかった。ベルリンの第一の関心はバルカンの重要な問題でロンドンと了解に達することにあつた。外務省官僚はまた地中海政策へのドイツの介入にイタリアがどう反応するかについても関心をよせていた。したがつて一九三七年六月一日、外相コンスタンティーン・フォン・ノイラートが、ロンドン、イエルサレム、バクダードに送つた電文は次のようなものとなつた。「ユダヤ人国家（ないしイギリス委任統治下でのユダヤ人の主導する準国家）の形成は、ドイツの国益を損なうことになる。何となればパレスティナのユダヤ人国家は世界ユダヤ人を吸収せず、政治的カトリシズムにとつてのバテイカン市国、コミンテルンにとつてのモスクワ同様、国際法によつて強化された権力的基礎を創り出すからである。したがつてドイツの利害は万一のこうしたユダヤ勢力の権力増大に対する対錘としてのアラブ勢力の強化にある。もつとも、ドイツの直接的な介入がパレスティナ問題の発展に重要な影響力を与えうるとは考えられない（が、それでも利害関係諸国にわが国の立場について無関心にならせないことが望ましい）。どんなことがあつてもパレスティナ・アラブには形だけの支持以上のものを与えてはならない。アラブ民族主義者の熱望に対する了解はこれまで以上にはつきり表明しても、確約はしてはならない。」

#### 将来のイスラエルに対するシオニストの構想

この段階でのイギリスの対パレスティナ政策は、イエルサレムの初代軍政長官、ロナルド・ストーズ卿の回顧録に簡潔に表現されているが、シオニストの「企てはストーズに感謝しなければならぬものになると同時に、イギリスのためには、敵としての潜勢力をもつたアラブの大海に浮かぶへ多少忠実なユダヤ

人のアルスター<sup>(7)</sup>を形成することによつて、ストーズ同様にギヴ・アンド・テイクの関係でつながつていた。これこそ、パレスティナを三分割する一九三七年七月のピール委員会の提案の精神であつた。パレスティナのすべてがなおイギリスの支配下にあり、イエルサレムからヤッファまでの小さな地域をイギリスは直轄支配し、ハイファは一〇年間保持し、その後は、二つの細片とそれをつなぐ地域（面積はノーフォーク州に相当する広さ）からなるシオニスト小国家に移管される。小さなシオニスト国家の実体はユダヤ系よりはるかに数の多いアラブ「マイノリティ」を含み、その一定部分は委員会が、パレスティナ残部を獲得するアラブ国家に転属させることも考慮することになつていた。

シオニスト内部の意見ははつきり分かれた。「ユダヤ人のアルスター」がオリジナルのアルスターと異なつていたところは、次の点にあつた。すなわち、自らの考えていたことが分割案によつて満たされたところに出でくる歴史的遺産のすべてを含んでゐた。結局、ピール委員会の分割案に対する世界シオニスト会議の回答は、慎重に条件をつけ、実質はイエスを意味したノーであつた。細かい分割は拒否したが、シオニスト執行部が今後より有利な交渉を引き出すためにケチをつける権限は与えられていた。

シオニズム運動は一九三七年段階で、それでは独自に、また何百万というユダヤ人のためにどのような国家を思い描いていたのだろうか。労働シオニストは運動の中では群を抜いて数の多い勢力であつたが、リーダーのデイヴィッド・ベン・グリオンほどに分割案受け入れを声を大にして主唱した者はいなかつた。一九三七年夏にベン・グリオンはポアレ・ツイオンの世界評議会チューリヒ総会の場で、この点では全然不安を抱く必要がない、後になれば必ず拡大する、と厳かに再保証した。

我々に今回提示されたユダヤ国家は、我々のために考えられたありとあらゆる賠償や改善措置がとられる場合ですらシオニストの目標といえるものではない（この領土ではユダヤ人問題を解決することはできない）。一五年（あるいは別の年数）経過して、領土的に制限された国家が人口飽和の臨界点に達したときに、いったい何がおこるだろうか。……自らに正直でありたいと願う人間なら、一五年先に何がおこっているかなど予言すべきでなからう。……分割案に対して反対する者は、パレスティナが、我々ユダヤ人のために与えられることで分割されてしまう（から反対だ）、と主張すれば、それは当たっている。ただし、パレスティナは、歴史的に見てばかりでなく、自然の、また経済の観点から見てもひとつのまとまった単位をなしているからである。<sup>8)</sup>

もしユダヤ人国家が実現するということになれば、それは必然的にパレスティナ人民の強い反対を打ち破って成就される、と労働シオニストが理解していたことは確かであった。労働シオニストは基本的にねにユダヤ民族主義者であったが、アラブ労働者の組織化につとめた、以前の微弱な努力を無視するばかりか、自分自身の過去の社会主義的レトリックまでも断固顧みなくなっており、オレンジ用の手袋をはめてアラブ労働者をその伝統的な季節労働から追い出し始めたのである。全体的に労働シオニストの考え方は病的になっていたので、自らの成功がヨーロッパ・ユダヤ人のミドル・クラスの没落から生じないか、今や意識的に期待するようになっていた。シオンを築くのは、そのミドル・クラスの逃避資本ということになった。アメリカへの派遣使者になったエンツォ・セレーニは中欧・東欧のユダヤ人ミドル・クラスに対してシオニズムが有する魅力をきわめて正確に測っていた。

ユダヤ人ブルジョアジーの胸中には二つの心が住みついている。ひとつは利潤を追求する心であり、いまひとつは政治権力を求める心である。……ひとつの政治集団としてユダヤ人ブルジョアジーは、まさにユダヤ人大衆なしでは生きていけない。大衆に依拠してはじめて政治的優位を構築できると望めるのである。また、アラブ労働者に対する最終的な統制力を行使しうるためには、ユダヤ人ブルジョアジーはユダヤ人労働者を必要とする。それは、ヨーロッパの強国が自らの帝国主義的プランを実行するには国民的なプロレタリアートを必要とするのとまさに同じである。

ユダヤ人シオニストのブルジョアジーを同じ階級の非シオニスト・ユダヤ人ブルジョアジーから区別させているものは、まさに次の事実だけだ。すなわち、シオニストのほうでは、階級としての自らの利害を達成しうるのは、ユダヤ人同化主義者が考えているのとは違い、もはや単なる個人としてではない。ただ統一されたひとつの国民国家という領野においてのみ可能なのである。<sup>9)</sup>

反セム主義は今やシオニズムの主要な勢力であると認められ、さらにまたシオニストのミニ国家を確立する点にもポジティブな魅力が生じた。当時労働シオニスト日刊紙『ダヴァル』の編集長だったモシエ・バイレンソンは資本家による将来の後背地として利用できる場所たるイスラエルにかけられた、かかる期待をナイーブに以下のように表明した。

「大シオニズム」を前に、今やパレスティナにおいて東方を指導するユダヤ人国家を獲得する闘争を我々の中のごくわずかな者だけがあえて展開する、そういう大きなパースペクティヴが開かれるであろう。……かかる基礎の上にうち立てられるユダヤ人国家は社会的にも精神的にも指導の資格、東方

における新世界の前衛たる資格を要求しうる完全な権利をもつことになろう。

バイレンソンは修辭的麗句の裏側の現実を以下のように形容している。

思想、生活、価値基準の大きな懸隔とは裏腹な、我々の、アラブ民族との人種上の近似性にどんな価値があるというのか。「人種的相違」が存在しても、右のような他の事柄すべてにおいて、我々はかやりの程度ヨーロッパ人あるいはまたアメリカ人により近いのではないか。……誤った博愛主義や偽りの伝道布教主義に立つことなく……我々はアラブ・イシュブとの和平を望む。東方の覚醒という場合、「民族的」東方であれ、「階級的」東方であれ、「宗教的精神的」東方であれ、どんな東方であろうとも革命的アプローチはない。……他の人間集団を解放するために我々はパレスティナにやっつきたのではない。我々自身を解放するためにここに来たのである。<sup>(10)</sup>

予言の自己実現がなされていく過程でこうした理論家が登場したのであった。ヨーロッパ・ユダヤ人に対する避けがたい財産没収をやるつもりであり、その後にはユダヤ人プロレタリアート、アラブ・プロレタリアートの搾取が続くのだと、かくも断固たる調子で言い切ることで、社会主義者を自任するシオニストは、ヨーロッパ人を動員するためには何もなさず、パレスティナ人の怒りを爆発させるにはあらゆることをなしたのである。

パレスティナにおけるシオニストの努力に対するナチの賞賛

ナチスはパレスティナ分割が全く動かしがたいものと観念していたので、主たる関心はパレスティナに在住する二千人のドイツ人の運命に向けられるようになった。カトリックの聖職者もプロテスタントの主流派も少数ながらいたが、ほとんどは、一九世紀以来キリストの再臨を期待してパレスティナに移住してきていた敬虔主義派、テンペル教団の人びとであった。彼らは最終的に六つの入植地に定住して生活も順調に経過したが、そのうちの四つが後にシオニストの飛領土(他領に囲まれた包領)に変化することになる。世界シオニスト機構指導部が、テンペル教団の人びとの問題をめぐって、といつてもこの時にはほとんど教団全員が誠実なナチ黨員になっていたが、この人たちのことで、ベルリンを敵にまわすのをどんなに避けようと欲しても、地域のナチ党は、分割後ユダヤ人による自発的なポイコットがおこなわれれば自らの立場が全くの困難に陥ってしまうと状況を理解していた。ドイツ外務省はドイツ人入植地を直接イギリスのコントロール下におくか、あるいはもつと現実的な解決法としてドイツ人をアラブ側の領域に移動させることを望んだ。

アラブ大衆の圧倒的意見は分割反対であった。もつとも、フサイニ家と対抗していたナシシビ家はユダヤ人国家が小さければ受け入れる可能性もあった。イギリスの提案への反対もナシシビ家の場合はきわめてためらいがちで、フサイニ家に対する激しい対抗党派的憎しみと結びついていて、分割反対への熱意の明白な欠如によって、アラブ共同体内部はひどい内戦状態に見舞われることになった。パレスティナの外で、ピール分割案の受け入れをあえて言外にほめかしていた唯一のアラブ指導者は、その首長国が分割案ではパレスティナ・ミニニ国家と合併することになっていたトランス・ヨルダンのアブドゥラーであった。